

元禄時代の江戸城本丸御殿図再論

深井雅海

はじめに

一 東京都公文書館蔵「御本丸奥表絵図」について

二 たつの市立龍野歴史文化資料館蔵「江戸城本丸御座鋪之図」について
おわりに

はじめに

筆者は、「江戸城本丸御殿図」に見る中奥・表向・大奥―その変遷を中心に―(上)(中)^①(以下、前稿(上)(中)と略す)において、東京都立中央図書館特別文庫室蔵の「御本丸寛永度絵図」と、名古屋市蓬左文庫蔵の「江戸御城殿中絵図」を紹介し、「御本丸寛永度絵図」は、寛永の年号がついているものの元禄期後半、「江戸御城殿中絵図」も、その内容から綱吉時代の御殿図であることを指摘した。

その後、調査の過程で、それぞれの絵図に酷似し、しかも、部屋名などの情報が豊富な二点の絵図を発掘することができた。そこで、再度、前稿

元禄時代の江戸城本丸御殿図再論

で紹介した絵図と比較しながら、元禄時代における御殿の構造について、考察したい。

一 東京都公文書館蔵「御本丸奥表絵図」について

「御本丸奥表絵図」は、旗本の新見正登・正路父子によって作成された「新見文書」^②に含まれる、本丸御殿の「奥」・「表」空間を示す絵図である。なお、本図とはほぼ同内容の絵図が、谷直樹編『大工頭中井家建築指図集―中井家所蔵本―』(思文閣出版、二〇〇三年)に収録されている。こちらの図の表題は、「御本丸惣指図」(同上書九一頁掲載)である。

では、東京都立中央図書館特別文庫室蔵の「御本丸寛永度絵図」と東京都公文書館蔵の「御本丸奥表絵図」を比較しながら、「奥」・「表」の構造について究明したい。図1が「御本丸寛永度絵図」、図2が「御本丸奥表絵図」である。図1は前稿(上)でも指摘したとおり、「護持院部屋」(図中番号①、以下同じ)が見えることなどから、元禄期後半の御殿図と推定される。

まず両図を比較してみると、構造的に非常に似通っていることがわかる。とくに、御座之間・御休息之間近くに見える二つの能舞台や楽屋などの状況がそっくりである。五代將軍綱吉は、「常憲院殿御実紀附録卷下」に、「常の御遊には殊更申樂を好ませ給ひ、常に御みづから人に先だちて御所作ありければ^③」と記されるとおり、能が趣味である。したがって、將軍の生活空間に能舞台や楽屋が張り出していることは、この時期の特徴といえる。このことから、図2の「御本丸奥表絵図」も綱吉時代の御殿図と推測される。

しかし、外観は似ていても、内部の部屋名などが異なっている部分があるので、詳細にみてみよう。図1に見える「護持院部屋」は、図2の該当部分^①では空欄となっているものの、その左下に見える、元禄二年（一六八九）設置の「奥御詰衆^④」部屋^②は同じ場所に見える。したがって、図2は元禄期後半より前の図である可能性が高い。

つぎに、「御座之間」の部分と比較してみよう。御座之間は、五部屋に分れている。上段・下段・御次・三之間は同じであるが、三之間の下に見える部屋名が異なっている。図1は「御囲炉裏間」、図2は「桐之間」である^③の部分。一方、後年の宝永二―三年（一七〇五―〇六）の御殿図と推定される図3の「江戸城御本丸御表御中奥御大奥総絵図」（東京都立中央図書館特別文庫室蔵）では、この部分は「相ノ間」^③となっている。

ここで、老中部屋の変化について記す、新井白石の「紳書」を引用してみよう^⑤（傍線筆者）。

一 厳有院殿^{○徳川家綱}の御代の頃迄は、御坐の間の下の間の次に、今もある九尺に三間の間を九畳敷といひて、其次の間の、間の襖障子を開けば、則今の相の間といふ所に今も有、夕顔の板戸たちし椽がはに、毎

日老中は伺候せられしなり、（中略）然れば毎日老中の伺候せられし間は、御坐の間よりしては、纔に御坐の間の次の間と、九畳敷の間とを隔てしのみなりき、^{○中略} 扱常憲院殿^{○徳川綱吉}御代の初も、大やうは元の如くなりしに、稲葉石見守^{○正休}、堀田筑前守^{○正俊}を刺殺せしは、かの松に藤の杉戸の口に参りて、御用候とて、筑前守の夕顔の杉戸の際の椽がはに伺候せしを呼たて、其次の間の松に藤の杉戸外にて刺殺したる也、是より御栖居改りて、昔より御膳立の間なりし所を老中の御用部屋と名付て、そこに老中伺候し、彼老中伺候の間を桐の間といひて、番衆など置れしなり、^{○註} 是より老中御前を遠ざけられし事幾間といふ事をしらず、（後略）

すなわち、「紳書」によれば、家綱時代から綱吉時代の初期、天和期までの老中の詰所は、將軍の御座之間の「次の間」^④と「九畳敷」（九尺に三間の間、^⑤を隔てた「今の相の間」（宝永―正徳期、^③であったという。ところが、貞享元年（一六八四）に、若年寄稲葉正休が大老堀田正俊をここで殺害するという刃傷事件が発生したため、「御膳立の間」を老中の御用部屋とし、「彼老中伺候の間」、つまり、「今の相の間」を「桐の間」と名付けて、番衆（桐之間番^⑥）などを置いたという。

この白石の「紳書」の記事を信用すると、図2の「御本丸奥表絵図」では、宝永―正徳期の「相の間」の部分が「桐之間」^③となっているので、図2は貞享頃の図ということになる。しかし、元禄二年設置の「奥御詰衆」部屋^②も記されていることから、それ以降の図であり、しかも、「御老中部や」^⑥が「御膳立の間」^⑦ではなく、「表」との境である「時主ノ間」の右に移されているので、貞享からさらに時期が経過した元禄期前半の図と考えておきたい。なお、老中部屋は、これ以降幕末期に至るま

で、この場所に定着している。

このように、老中の部屋が將軍の御座之間の中に設けられていたことは、家綱時代までは老中が將軍の側近であったことを物語る。しかし、綱吉時代初期、大老堀田正俊刺殺事件を契機に、老中の御用部屋を「表」近くに移したことは、老中の役目が、將軍の補佐役というよりも、行政機構Ⅱ「表」の長官としての機能が強まる結果になったといえよう。老中に代わって、將軍の政務補佐役となったのが、側用人である。側用人の詰所は、「奥」の中心部に見える「御用部屋」二つ⁽⁸⁾と考えられる。宝永二―三年の状況を示す図3でも、この辺りに当時の側用人である松平(柳沢)吉保と松平輝貞の部屋⁽⁹⁾が設けられていた。図2を元禄期前半の図と推定すると、二つの「御用部屋」は、当時の側用人牧野成貞と柳沢保明の部屋ということになるか。その下側には、小性⁽¹⁰⁾、小納戸⁽¹¹⁾、御廊下番⁽¹²⁾など側近役の詰所も設置されていた。

ついで、「表」の空間をみてみよう。「表」で注目されるのは、下部屋付近である。図1では詳細は不明であるが、図2では納戸口(老中口)が「奥中ノ口」⁽¹³⁾と記載されている。通常、納戸口には老中・側用人・若年寄・側衆などの下部屋が設けられている。⁽⁹⁾ところが、この図では、右から「留守主居」・「御勘定頭」・「御守衆」(二部屋)・「肥後守」・「出雲守」と記される。これらの部屋について考察してみよう。

まず、留守居と勘定頭についてである。松尾美恵子氏の研究⁽¹⁰⁾によると、寛永末年頃には留守居が勘定頭の職務を兼務していたという。それが、慶安期に留守居専任となったものの、金銀の出納業務はこれ以降も留守居に属していたが、元禄二年(一六八九)に至って、勘定頭が幕府財政機構を全面的に掌握することになったという。留守居と勘定頭の部屋が並んで設け

られていることは、この間の移動を示すものであろうか。今後の検証が必要である。

つぎに、「御守衆」についてみよう。綱吉時代の「御守衆」という役目でまず考えられるのは、綱吉世子の徳松付きである。徳松は延宝七年(一六七九)五月に神田御殿で生まれ、父綱吉の將軍家相続に伴い、翌八年十一月、將軍世嗣として江戸城西丸御殿に移ったものの、天和三年(一六八三)閏五月に没した。⁽¹¹⁾この徳松には、綱吉の館林時代、「徳松様方」として、内藤重兵衛(正興)・本庄太郎兵衛(資俊)・杉浦左之助(典治)・黒田三五郎(直邦)・金田与左衛門の五名が付属していた。⁽¹²⁾彼らは、徳松が西丸に移った際に従っている⁽¹³⁾ので、そのまま「御守衆」となった可能性が高い。世嗣付きとして、本丸御殿にも下部屋を与えられたものと思われるが、徳松は天和三年に没しているので、図2を元禄期前半の御殿図とすると齟齬が生じる。あるいは、この「御守衆」は綱吉の生母桂昌院付きと、その側室お伝の方付きを指すのであろうか。いずれにしても、こちらもさらなる検証が必要となる。⁽¹⁴⁾

ついで、官職名の「肥後守」と「出雲守」についてみよう。「肥後守」については、將軍綱吉の従兄弟にあたる保科正容と思われる。正容は、綱吉の叔父・保科正之の六男に生まれ、延宝八年(一六八〇)八月兄正経の継嗣となり、同年閏八月、井伊直該・松平忠弘などとともに溜間に伺候した。天和元年(一六八一)二月、家督を継ぎ会津城主、同年二月従四位下侍従に叙任され、肥後守を兼ねた。貞享四年(一六八七)四月には、東山天皇の即位のときに使者として派遣され、少将に任ぜられた。元禄九年(一六九六)には、松平の称号と葵紋を許されている。⁽¹⁵⁾「有司勤仕録」の「溜詰」の項には、「保科肥後守正之は、其頃威徳兼備りて、天下の人口定と

して政務を取計ふ、夫故統て後々肥後守正容此職たり」とある。⁽¹⁶⁾溜詰のなかで正容のみ部屋を与えられたのは、血縁関係の近さからであろうか。

「出雲守」については、同時代に同じ官職名を名乗り、將軍側近であった者が数名いる。奥詰の金森頼哲、小性並の前田玄長、高家の大沢基躬などである。高山城主金森頼哲は、天和三年一二月従五位下出雲守に叙任され、元禄二年四月奥詰となり、五月には「御側のつとめ」となったものの、翌三年四月に免職となった。⁽¹⁷⁾前田玄長は、公家の押小路公音の二男として生まれたが、元禄一五年閏八月、幕府に召し出されて小性並となり、一二月に従五位下侍従に叙任され、出雲守と称した。宝永六年(一七〇九)二月には、高家に列している。⁽¹⁸⁾大沢基躬は、貞享四年八月に知行一〇〇〇石・麴米六〇〇俵の遺跡を継ぎ、元禄五年正月奥高家となり、従五位下侍従に叙任されて越中守を名乗り、のち出雲守に改めた。⁽¹⁹⁾

三名の中で該当者に最も近いのは、大沢基躬と考えられる。大沢基躬(基珍)は、綱吉の生母桂昌院の姉瑞光院の孫、つまり、桂昌院の姪の子にあたる。綱吉が桂昌院の一族を取り立てたことは、「柳宮婦女伝系 卷之十一 桂昌院殿之伝系」に、「御恩光に依て其家を再興し、或は門楣を輝す者普く多し」と記されることでもわかる。大沢氏も、本庄氏とともにその「恩光」に与った家である。⁽²⁰⁾すなわち、大沢基躬は、高家の家柄でないにもかかわらず奥高家に登用され、元禄一五年三月の桂昌院叙位と宝永元年一二月の家宣養君決定の際に京への使者を務めるなど、重用されている。⁽²¹⁾ただし、基躬が出雲守を名乗るのは、宝永三年頃からと思われるので、図2を元禄期前半の図とすると、食い違いが生じる。御殿図は、場所によっては別々の時期の状況が記載される場合があるので、図2の「奥中之口」付近については今後の課題としておきたい。

以上のように、「御本丸奥表絵図」は、「奥中之口」部分が別の時期の状況を示す可能性もあるが、「奥」空間の構造などから、元禄期前半の御殿図と推測しておきたい。綱吉は、將軍御座所や休息所の改造を、延宝八年七月(移徙は一〇日)、貞享元年一二月(移徙は九日)、貞享三年一月(移徙は二日)と行っている。⁽²⁴⁾「御本丸奥表絵図」は、貞享三年改造後の状況を示すものと思われる。

二 たつの市立龍野歴史文化資料館蔵「江戸城本丸御座鋪之図」について

「江戸城本丸御座鋪之図」(口絵1)は、龍野城主であった脇坂家の次席家老を務めた田付家旧蔵文書に含まれていた、本丸御殿の「表」空間の絵図である。なお、第一節で紹介した「御本丸奥表絵図」と同じく、本図とほぼ同内容の絵図が、谷直樹編『大工頭中井家建築指図集—中井家所蔵本—』に収録されている。その表題は、「御城中御表向絵図」(同上書九六頁掲載)である。

では、名古屋市蓬左文庫蔵の「江戸御城殿中絵図」と比較しながら、「表」の構造について明らかにしたい。図4が「江戸御城殿中絵図」、図5が「江戸城本丸御座鋪之図」である。両図を比較してみると、構造的に非常に似通っていることがわかる。しかも、両図とも、老中口に、御廊下番(貞享元年正月—宝永六年二月設置、①)、御次番(貞享二年五月—宝永六年二月設置、②)、中之口に奥詰衆(元禄二年三月—宝永六年正月設置、③)の下部屋が設けられていることから、綱吉時代の元禄期以降の御殿図であることは明らかである。

とくに、図5の「江戸城本丸御座鋪之図」には、老中口の下部屋に、個別の官職名が記載されていることが注目される(図6参照)。すなわち、右(奥から老中の大久保加賀守(忠朝)・阿部豊後守(正武)・戸田山城守(忠昌)、側用人の牧野備後守(成貞)、老中の土屋相模守(政直)、左手前から側用人の柳沢出羽守(保明)、若年寄の加藤佐渡守(明英)・秋元但馬守(喬知)・内藤丹波守(正親)それぞれの在職期間から、この御殿図は、元禄三年(一六九〇)一〇月から同七年四月までの絵図であることが判明する。したがって、図4の「江戸御城殿中絵図」(こちらは老中の職名のみ記載も、ほぼ同時期の図と思われる)。

つぎに、第一節で元禄期前半の御殿図と推測した「御本丸奥表絵図」の「表」の部分と比較してみよう。図7は「御本丸奥表絵図」、図8は「江戸城本丸御座鋪之図」の黒書院付近の図である。まず注意すべきは、図7の「時圭ノ間」(時斗之間、①)の右側が「御老中部や」、「御用部や(若年寄部屋)」と記載されているのに対し、図8では「御膳立之間」(②)と記されていることである。すでに第一節で引用した新井白石の「紳書」によれば、貞享元年(一六八四)の堀田正俊刺殺事件を契機に、「昔より御膳立の間なりし所を老中の御用部屋と名付て、そこに老中伺候し」とある。もし、白石が述べる「昔より御膳立の間」が図8の「御膳立之間」(②)に該当するならば、図8のこの部分は、貞享元年以前の状況を示すことになる。⁽²⁷⁾

かかる視点でみれば、図7と図8は、いくつかの部屋で相違がみられる。「時圭ノ間」の外にある「新番詰所」(「新御番所」、③)は同じであるが、その上の「中ノ間」(④)と「羽目ノ間」(⑤)は、図8では共に「焼火之間」と記載されている。さらに、図7の部屋名の部分が、図8では職名で記される所が四ヶ所ある。すなわち、「中奥ノ間」が「中奥衆」(⑥)、「菊之間」

が「御小姓組番頭・御使番」(⑦)、「焼火ノ間」(図7では判読しがたいが、同内容の「御本丸惣指図」(「中井家所蔵本」)では「焼火ノ間」と記載されている)が「諸役人伺公之間」(⑧)、「桔梗ノ間」が「御番医者衆」(⑨)となっている。そして、同一の部屋名と職名が記される所が一ヶ所、「鷹之間・御詰衆」(⑩)である。

これらの部屋と職名との関係は、万治二年(一六五九)九月の「殿中席書」⁽²⁸⁾によると、各役職の殿中席に該当する。ただし、同史料では、「中奥ノ間」は「款冬之間」、「桔梗ノ間」は「躑躅之間上北之間」、「焼火ノ間」は「躑躅間北ヨリ二之間」と記されている。「桔梗ノ間」と「焼火ノ間」が上記のように記される理由は、躑躅之間の北側に部屋が位置するためと思われる。また、「焼火ノ間」(「躑躅間北ヨリ二之間」)の「諸役人」とは、この部屋に殿席を与えられた納戸頭・腰物奉行頭・二丸留守居番・裏門番頭・広敷番頭などと考えられる。

さらに注目されるのは、図8の中心部に見える「竹之間」(⑫)である。「甲府殿御部屋」と記載されている。つまり、「竹之間」は甲府綱豊(甲府城主、のちの六代将軍家宣)⁽²⁹⁾の詰所兼控席であった。同じ徳川一門でも、御三家が玄関に近い大廊下に部屋を与えられている(図5の④)ことと比べれば、將軍綱吉の甥にあたる綱豊は、「奥」近く(図5の⑤)、しかも床の間付きの部屋を与えられ、優遇されていることがわかる。

つまるところ、「江戸城本丸御座鋪之図」は、下部屋付近からすれば、元禄三〜七年頃の図とすることができ、黒書院近くからみれば、もう少し早い時期、家綱時代後期〜綱吉時代初期の状況を示す可能性もあるのだ、今後のさらなる考証が必要といえよう。

なお、宝永二〜三年(一七〇五〜〇六)の御殿図である図9によれば、新

番所は桔梗之間(9)に移動し、元新番所は「溜り」(3)と記載されている。また、山吹之間の上にあった「御目付衆部屋」(13)は紅葉之間の左(14)に移り、「中奥ノ間」(6)は消滅している。

おわりに

本小稿では、東京都公文書館蔵「御本丸奥表絵図」と、たつの市立龍野歴史文化資料館蔵「江戸城本丸御座鋪之図」を紹介し、五代將軍綱吉時代の江戸城本丸御殿の構造について考察した。両図とも、ほぼ同内容の御殿図が幕府大工頭中井家に所蔵されており、絵図の信用度は高いと思われる。

しかし、御殿図の内部を詳細に検討してみると、両図とも、特定の時期に限定することは、無理が生ずることが判明した。両図とも、全体的にみると、元禄時代の状況を示す御殿図と推定されるが、一部それ以前の内容が含まれている可能性が高い。したがって、御殿図には異なる年代の状況が記載される場合があるので、年代測定にあたっては、慎重さが求められるといえよう。

註

- (1) 『徳川林政史研究所「研究紀要」』第二七号・二八号(一九九三・一九九四年)。
- (2) 『新訂寛政重修諸家譜』第三、三一九頁。新見家は、正登のとき家禄八一〇石余であったが、正路が西丸御側御用取次に登用された際、二〇〇〇石高に加増された(『柳営補任』一卷、一一一頁)。新見文書は全三五四点、「御本丸奥表絵図」は整理番号六〇である。

- (3) 『徳川実紀』第六篇(吉川弘文館、一九六五年)七五一頁。
- (4) 『古事類苑』官位部三(古事類苑刊行会、一九三〇年)七四二・七四三頁。
- (5) 『同右』二〇九頁。宮内庁書陵部蔵「紳書(白石叢書)」。
- (6) 『吏徴附録(職)』によると、桐之間番は天和元年(一六八二)七月一〇日の創設という。そのとき任命された三名は、「向後桐之間に可相詰旨」を命じられているので、その際は、別の場所に桐之間が設置されていたことになる(『同右』七六三頁)。
- (7) なお、將軍綱吉が元禄十一年(一六九八)三月一日、尾張家の麴町屋敷に御成したときの「御成御殿御指図(東京都立中央図書館特別文庫室蔵)」によると、老中などの「御用部屋」(六室)の他に、小性・小納戸など將軍側近の部屋が集中する場所に、二つの「御用部屋」が設けられているので、これが側用人(柳沢保明・松平輝貞)の詰所と推測される。深井雅海『図解 江戸城をよむ(原書房、一九九七年)二〇四・二〇五頁参照。側用人の部屋も「御用部屋」と称されるのは、当時の側用人が老中合議にも参加する(深井雅海『徳川將軍政治権力の研究』(吉川弘文館、一九九一年)三五・三七頁)幕閣の構成員であったからであろうか。
- (8) 『吏徴附録(職)』によると、廊下番は貞享元年(一六八四)正月の創設とされる。また、「泰平年表」には、「御廊下番は、皆能役者より堪能のものを召出され、苗字を改め御番を勤しなり」と記載されている。『古事類苑』官位部三、七六六頁参照。
- (9) 後出図6の「江戸城本丸御座鋪之図」参照。
- (10) 松尾美恵子「江戸幕府職制の成立過程―初期留守居の補任者と職務内容の検討―」(児玉幸多先生古稀記念会編『幕府制度史の研究』吉川弘文館、一九八三年、所収)一八五・一八六頁。なお、大野瑞男氏も、寛永末年以降も留守居の財政関与は続き、元禄二年に至って、幕府財政機構は勘定頭によって全面的に掌握されることになった、と指摘している(同氏著『江戸幕府財政史論』吉川弘文館、一九九六年、二二〇頁)。
- (11) 『徳川諸家系譜』第一(統群書類従完成会、一九七九年)五二頁。『徳川実紀』第五篇(吉川弘文館、一九六五年)延宝八年十一月二七日条。

(12) 深井雅海「史料紹介」東京国立博物館所蔵「館林様分限帳」について(大石慎三郎編『近世日本の文化と社会』雄山閣出版、一九九五年 所収)二五二頁。

(13) 『新訂寛政重修諸家譜』第一五、一七九頁。『同上』第二二、一〇八頁。『同上』第九、八九頁。『同上』第一一、九四頁。

(14) なお、延宝八年(一六六〇)〜貞享元年(一六八四)の「武鑑」によると、「禁中様御・守衆」・「新院様御・守衆」・「本院様御・守衆」と記載されているが、奥向きの役職ではないため、指摘するに止める(深井雅海・藤實久美子編『江戸幕府役職武鑑編年集成』第三卷(東洋書林、一九九六年) 参照)。

(15) 『新訂寛政重修諸家譜』第一、二六〇〜二六一頁。

(16) 『古事類苑』官位部三、一七一頁。

(17) 『新訂寛政重修諸家譜』第六、二五六頁。

(18) 『同右』第二一、八四頁。

(19) 『同右』第二二、一一八頁。

(20) 『徳川諸家系譜』第一、二一八〜二二九頁。

(21) 註(19)に同じ。

(22) 「武鑑」によると、高家の大沢は、宝永二年までは越中守を名乗っているが、宝永三年から出雲守に改めている(深井雅海・藤實久美子編『江戸幕府役職武鑑編年集成』第六卷、二二二・二八九頁)。

(23) たとえば、「東武御本丸絵図」(徳川林政史研究所蔵は、「表」の部分は「御小納戸口」(納戸口)に記された人名から、延享四年(一七四七)〜寛延元年(一七四八)までの御殿図と推定されるが、「奥」の部分は、そこに記された人名から、享

保一五〜一六年(一七三〇〜三一)頃の状況を示すものと考えられる。深井雅海『江戸城御殿の構造と儀礼の研究』(吉川弘文館、二〇二一年)二七〜二八・一〇三・一一〇頁参照。

(24) 『東京市史稿』皇城篇第二、三四九〜三五一・三六九〜三七一・三七九〜三八三頁。

(25) 『古事類苑』官位部三、七六五〜七六六・七六八・七四二〜七四三頁。

(26) 竹内誠編『徳川幕府事典』(東京堂出版、二〇〇三年)四三三〜四三六・四五九・四六七〜四六八頁参照。

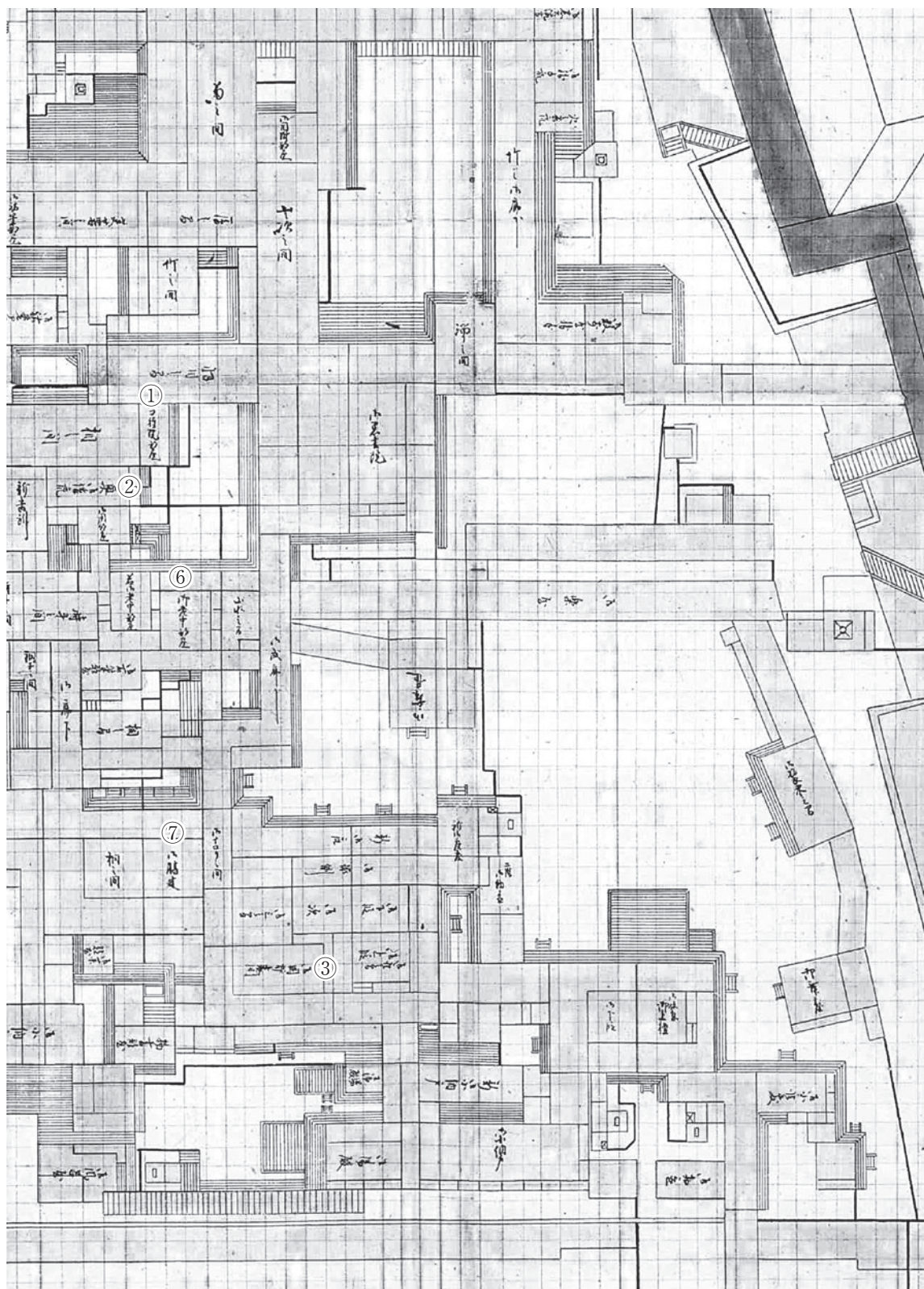
(27) あるいは、第一節で指摘したとおり、「奥」にある図2の「御膳立の間」がまず老中の御用部屋となり、さらに時間が経過したのち、「表」近く(図7の②)に移されたとも考えられる。白石の「是より老中御前を遠ざけられし事幾間といふ事をしらず」といふ文言を、一氣に「表」近くに遠ざけたのか、段階的に遠ざけたのか、どちらに理解するかによっても異なる。いずれにしても、この問題は今後の課題にしておきたい。

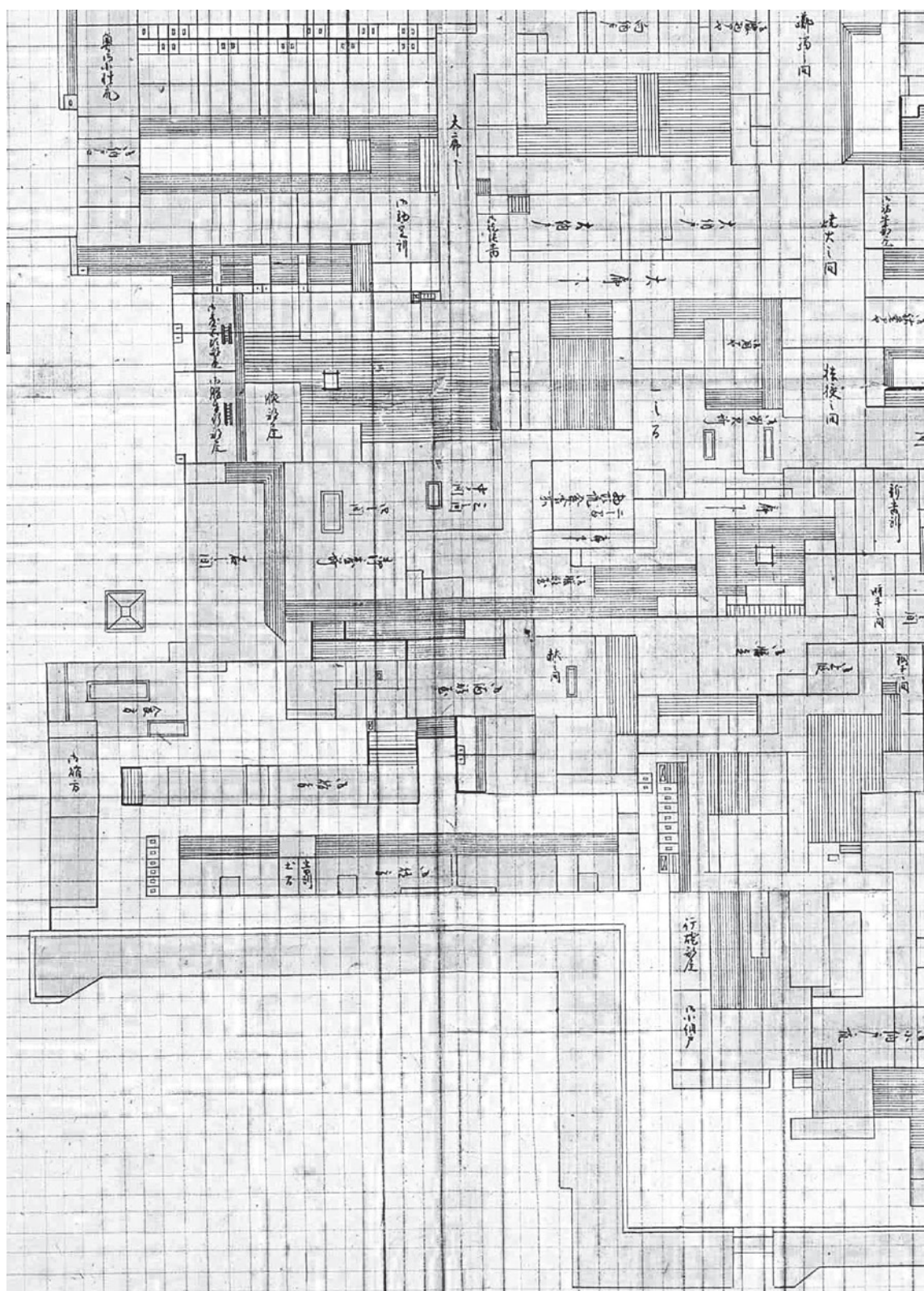
(28) 『御触書寛保集成』一九号(岩波書店、一九七六年)二五〜二七頁。

(29) 綱豊は、寛文二年(一六六二)四月に生まれ、延宝六年(一六七八)一〇月に父綱重の家督を継いで甲府城主となり、宝永元年(一七〇四)二月、將軍綱吉の世子として江戸城西丸御殿に入った(『徳川諸家系譜』第一、五三頁)。したがって、この場所からすれば、延宝六年〜宝永元年までの図ということになる。

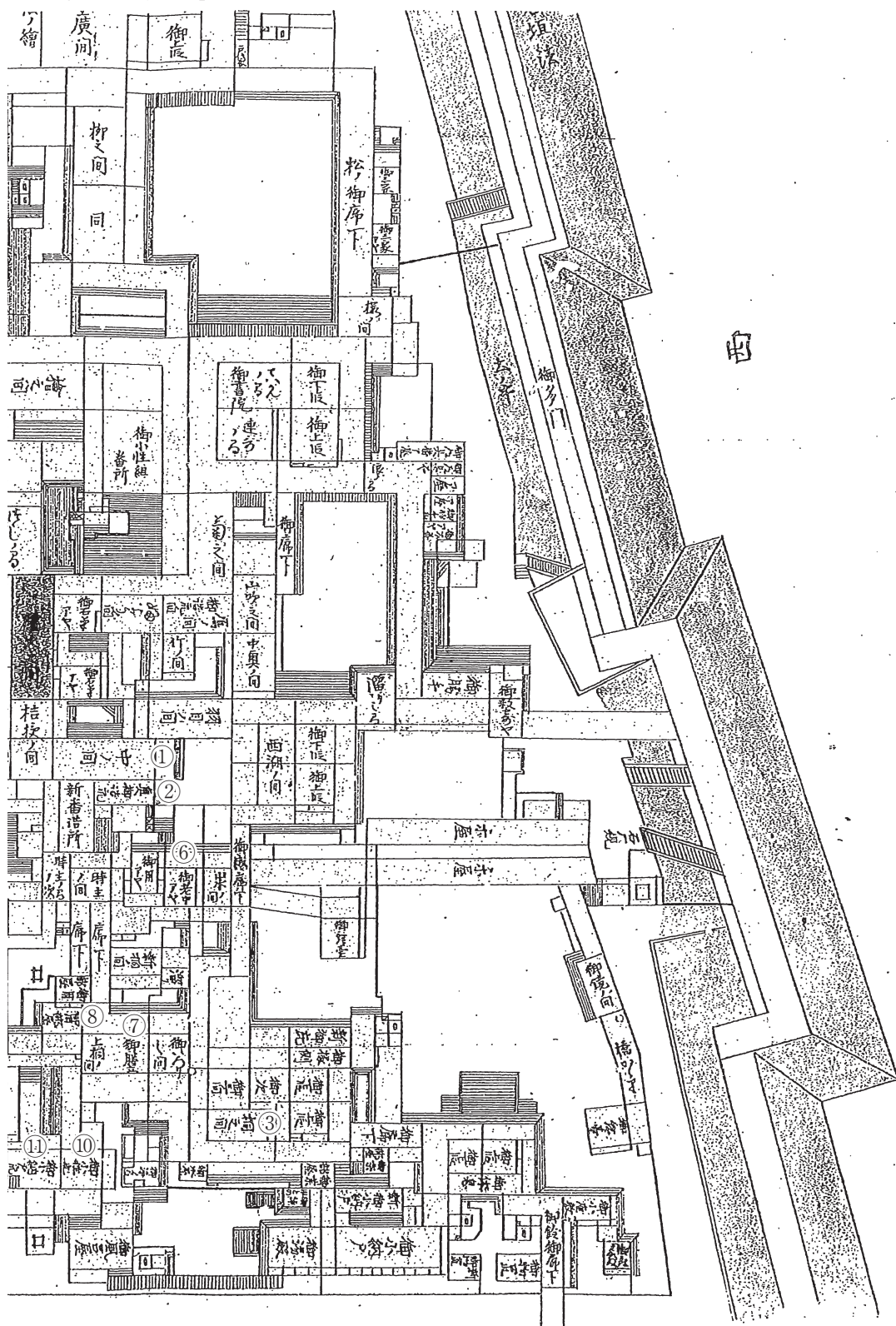
(30) 註(23)の深井著書二七頁も参照。

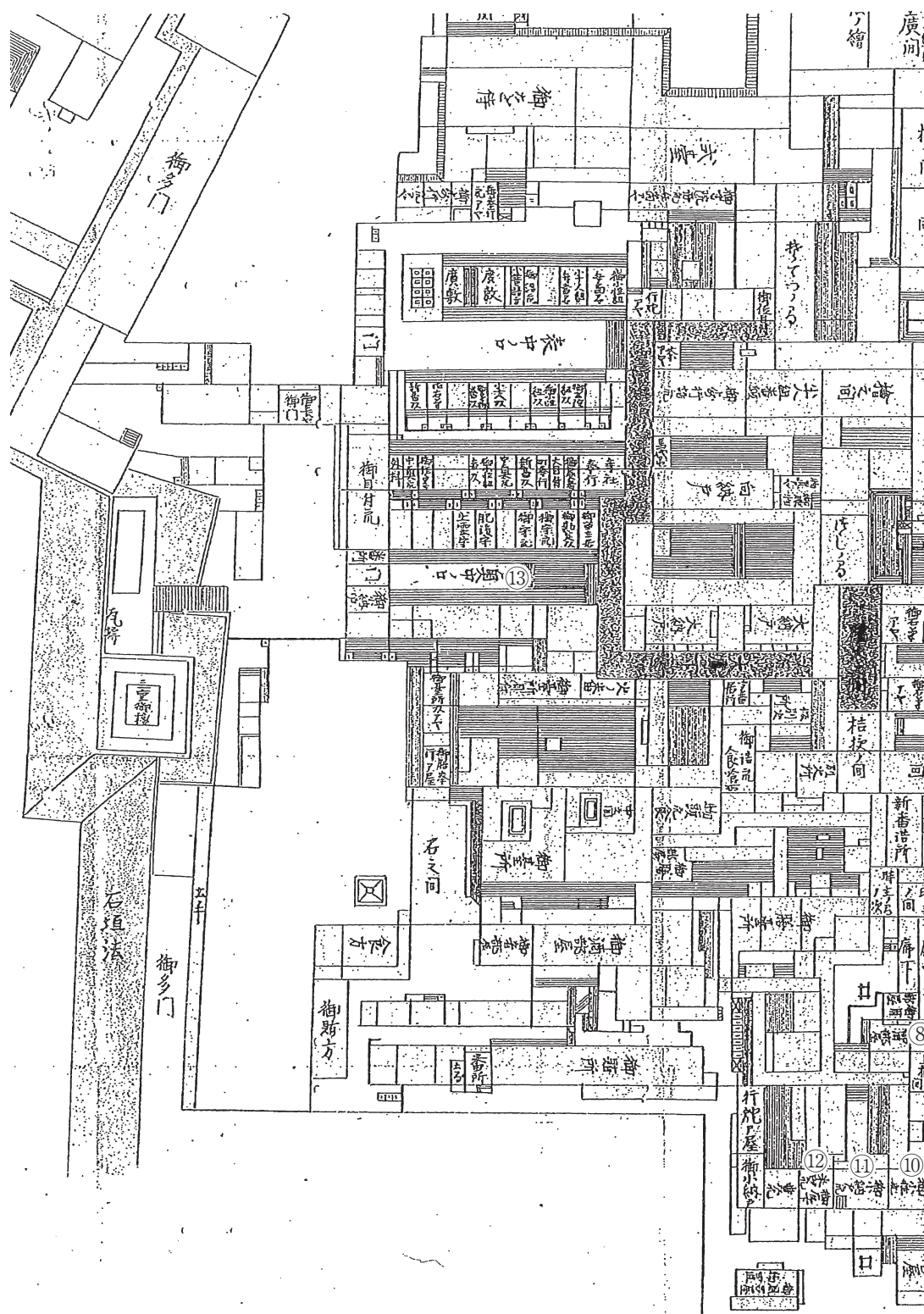
図1 「御本丸寛永度絵図」





御座
廣間
繪





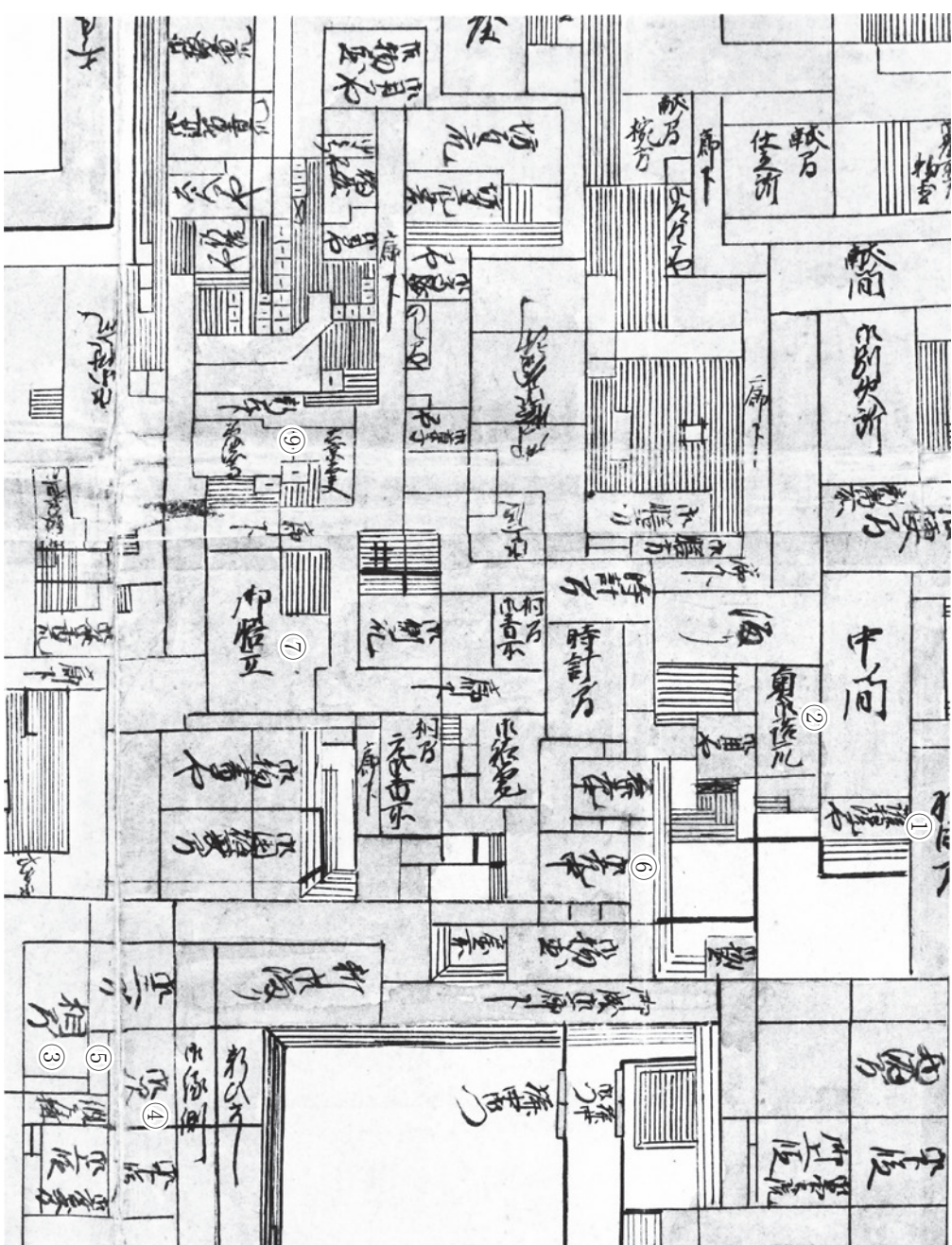
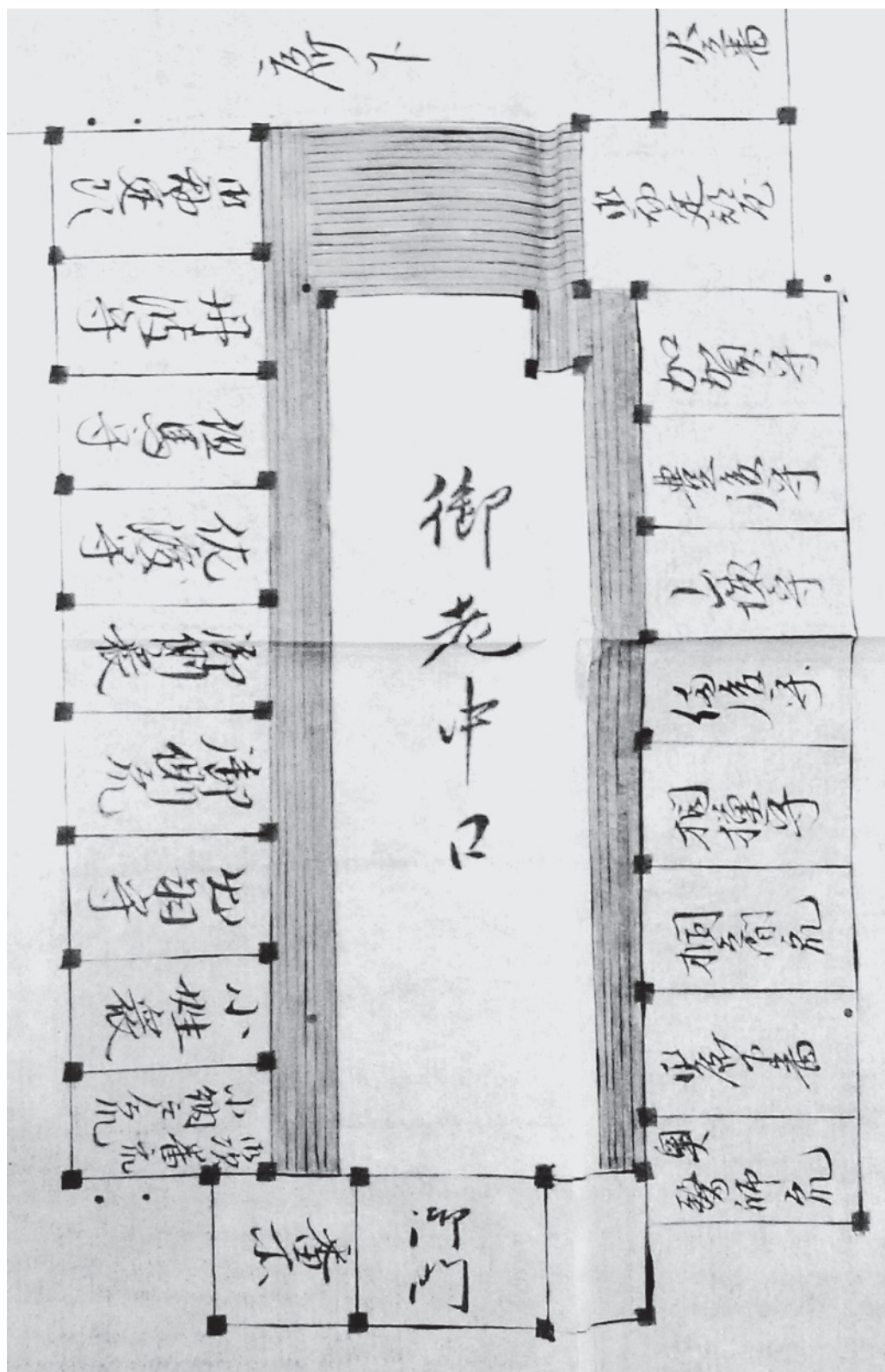
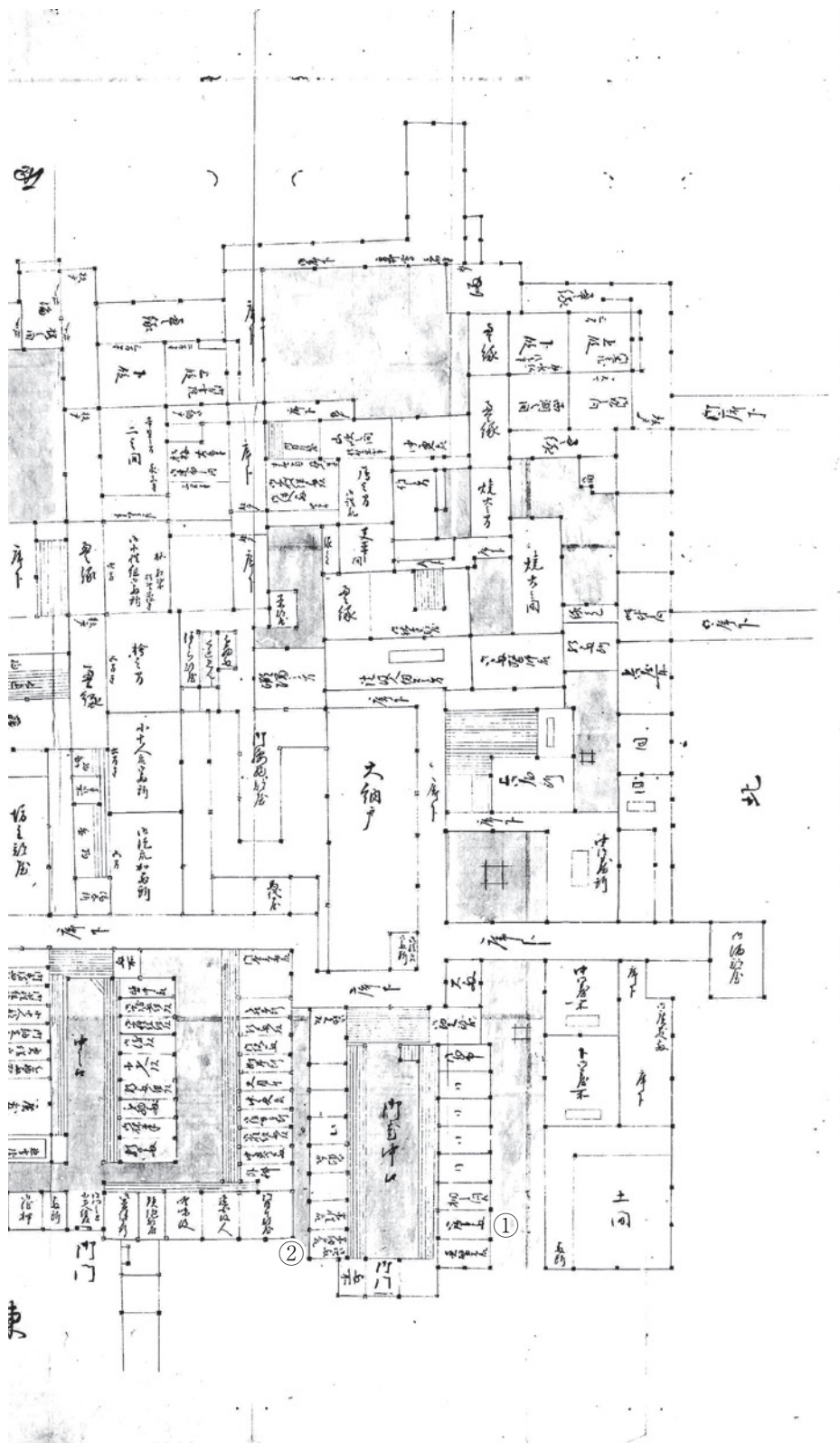


図6 「江戸城本丸御座舗之図」に見える老中口の下部屋



註 たつの市立龍野歴史文化資料館蔵

図4 「江戸御城殿中絵図」



註 名古屋市蓬左文庫蔵

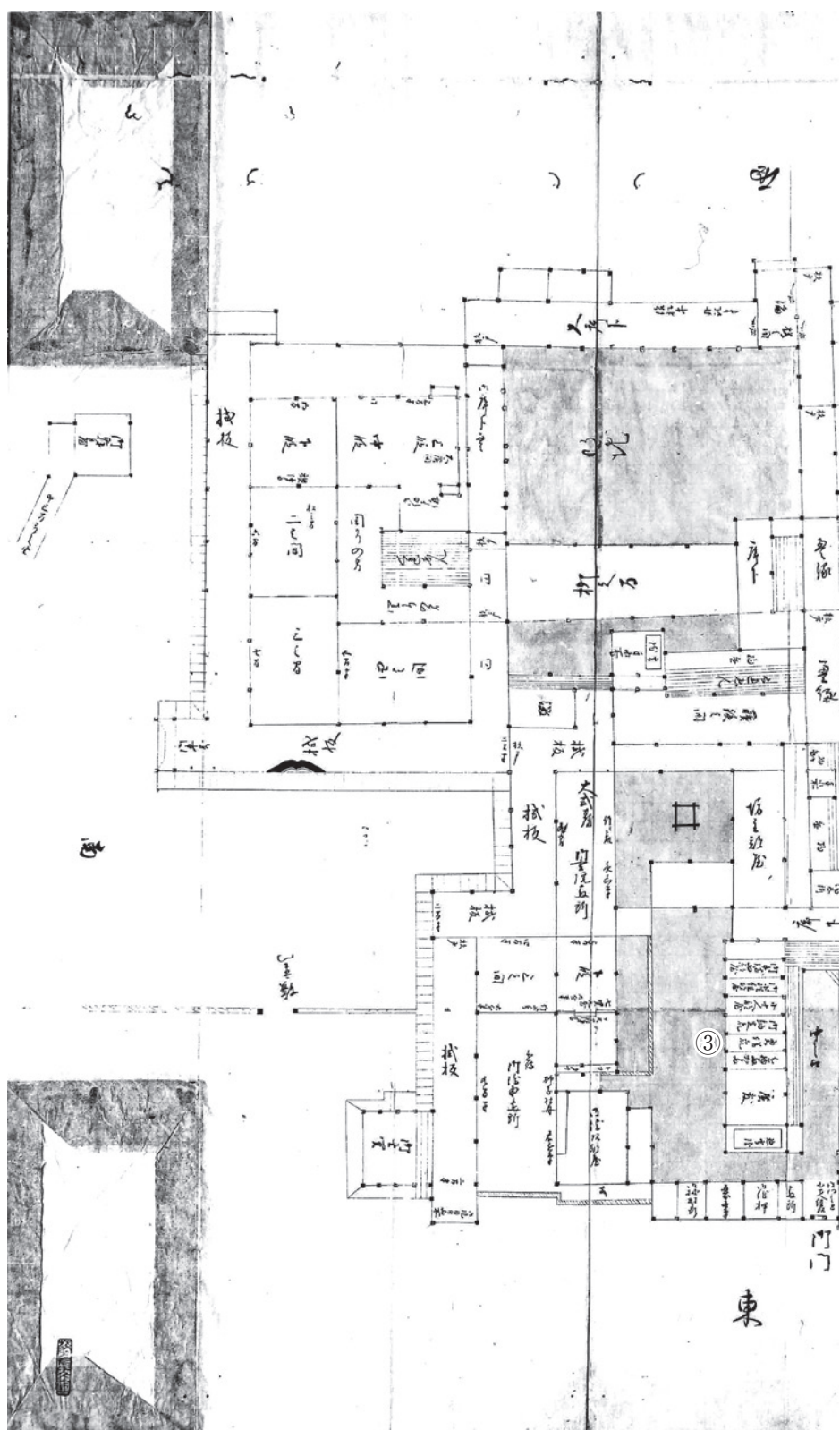
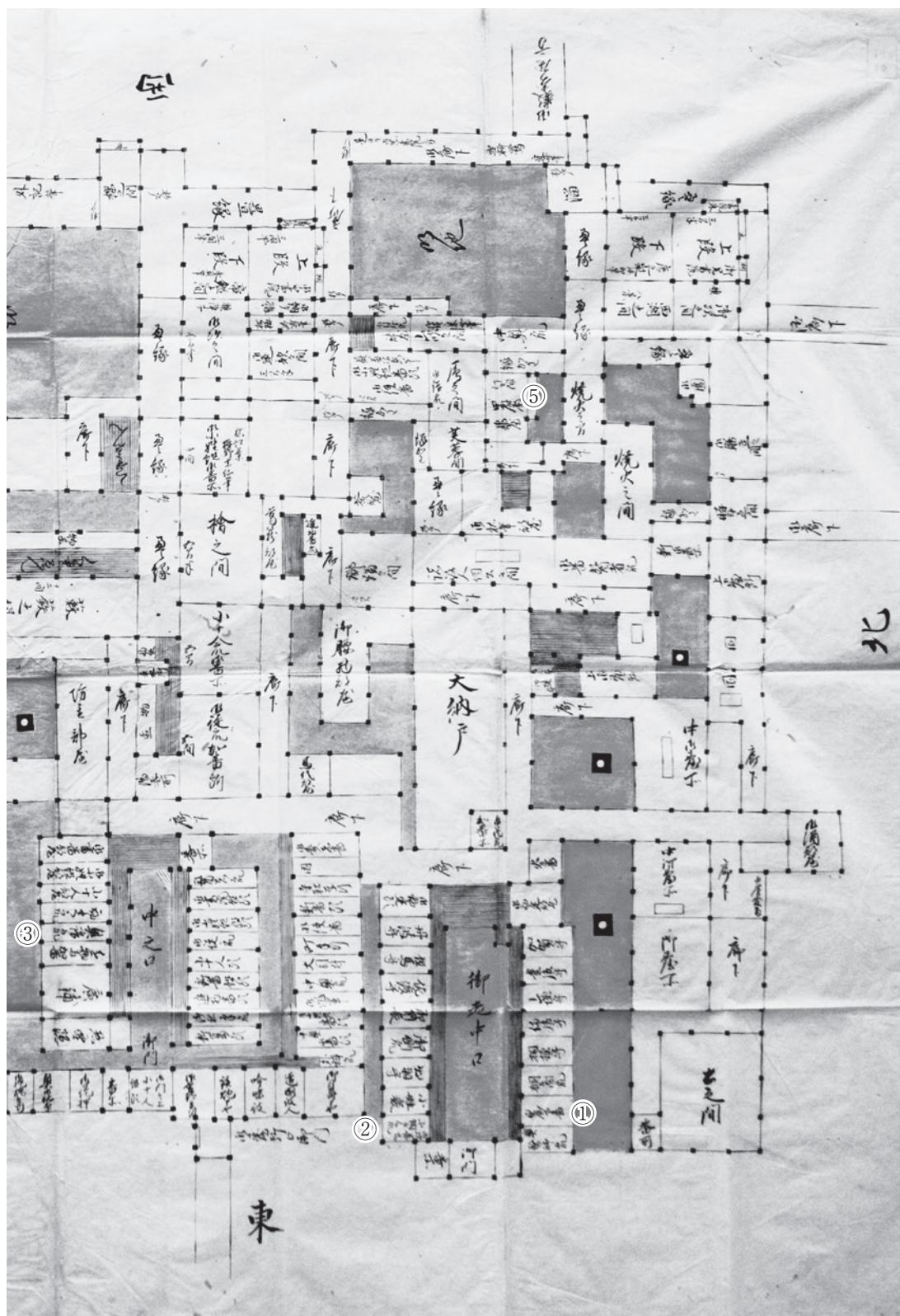


図5 「江戸城本丸御座舗之図」

元禄時代の江戸城本丸御殿図再論

一六

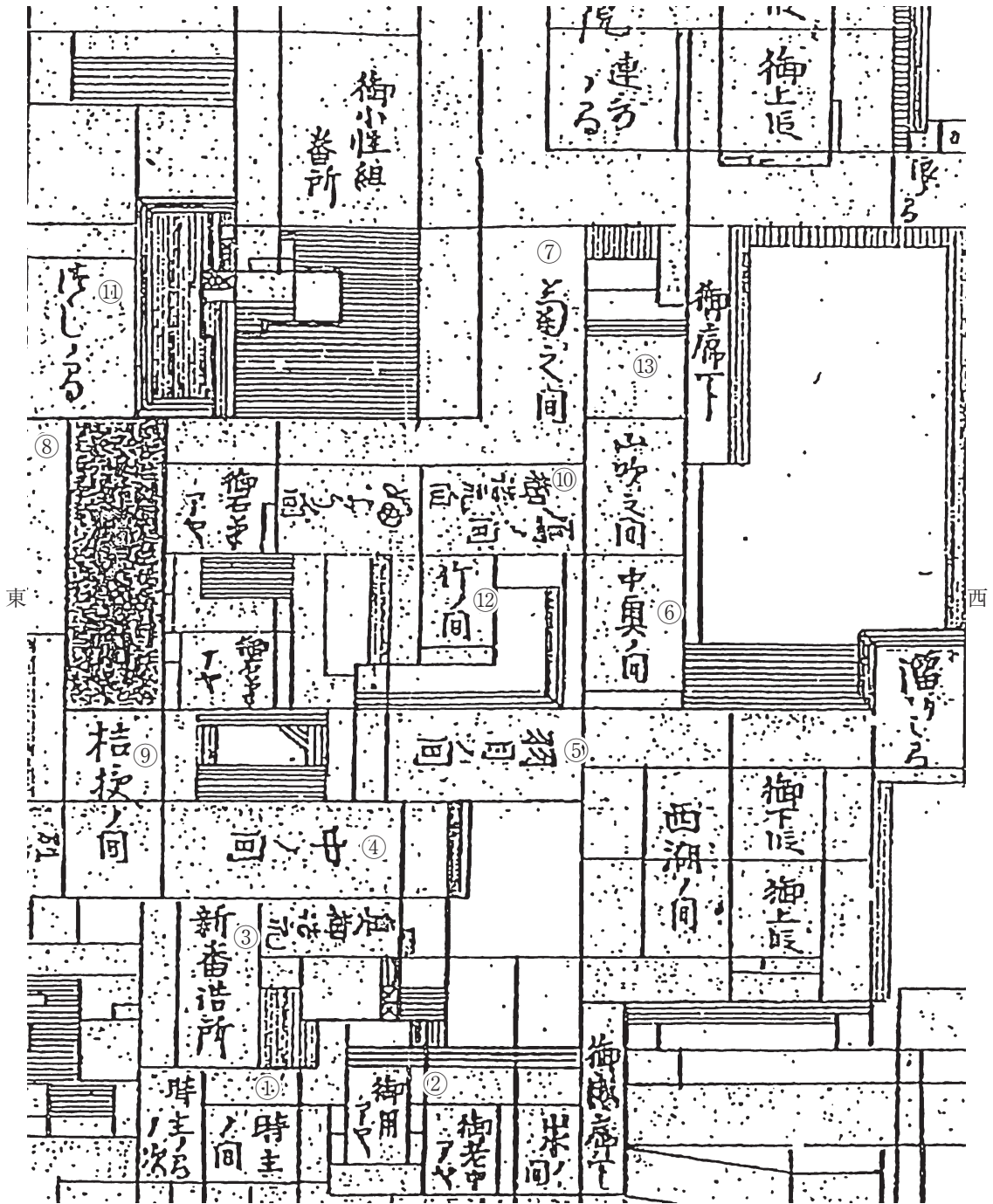


註 たつの市立龍野歴史文化資料館蔵



図7 「御本丸奥表絵図」(部分)

南



元禄時代の江戸城本丸御殿図再論

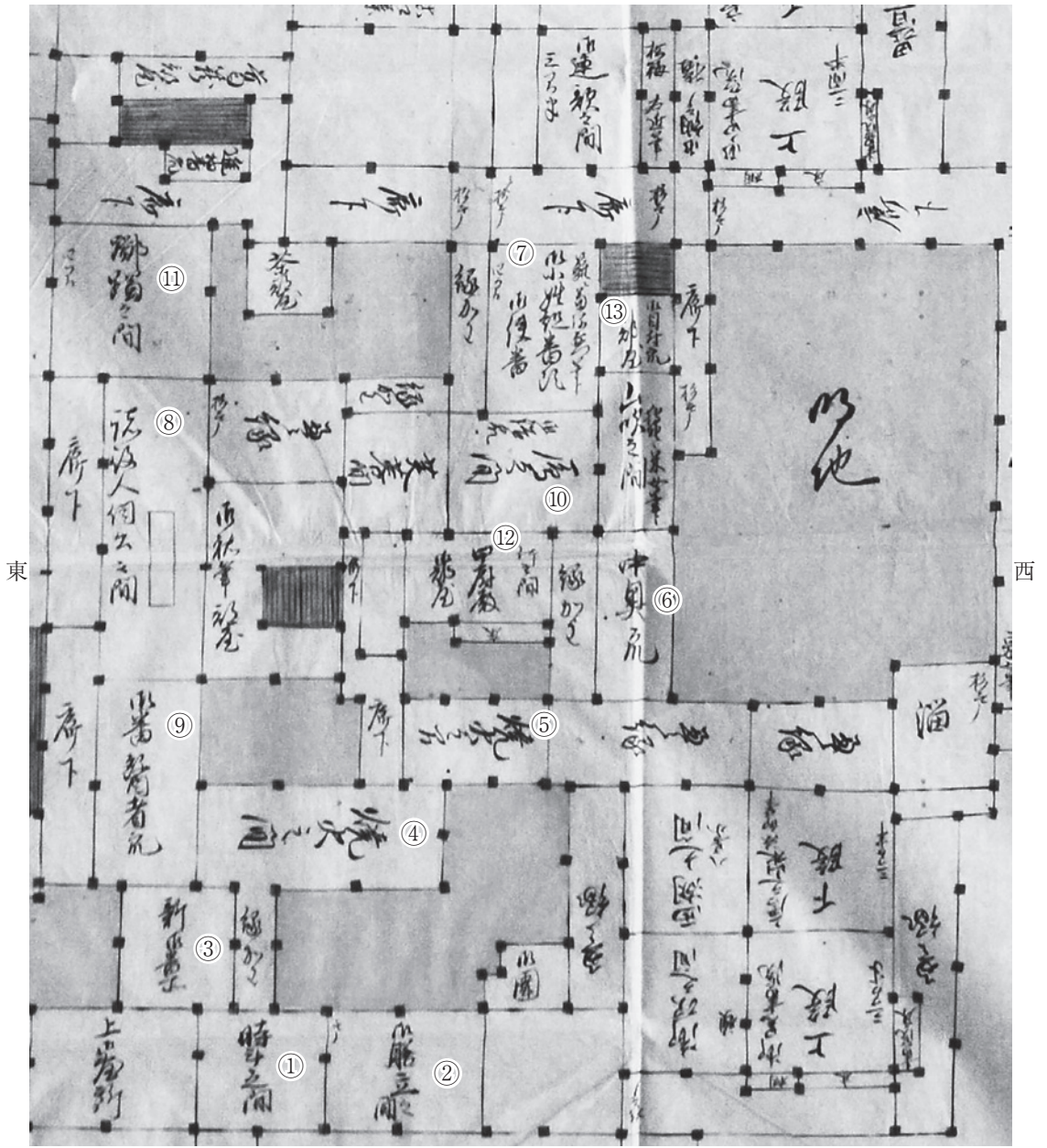
北

註 東京都公文書館蔵

図8 「江戸城本丸御座舗之図」(部分)

南

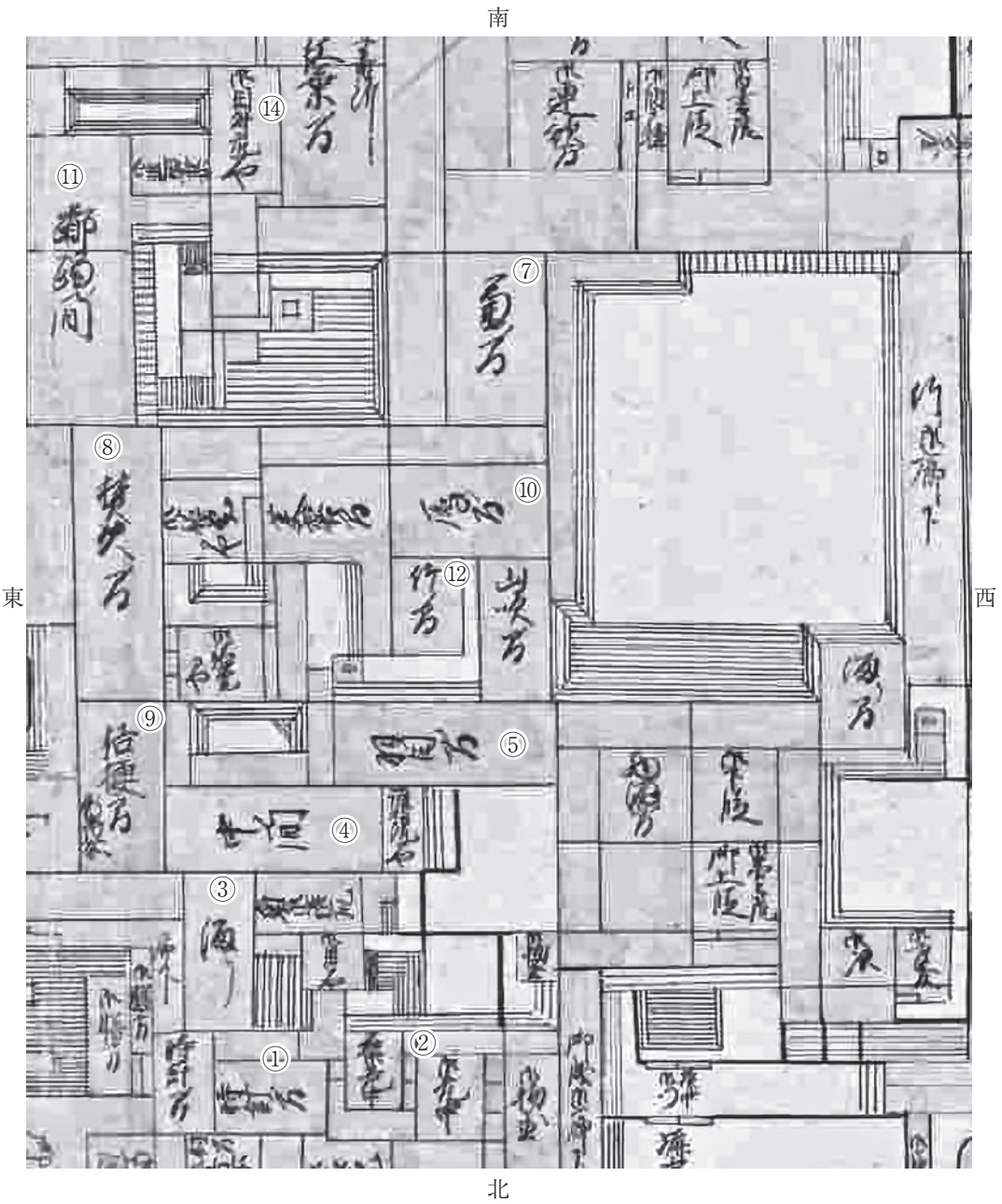
元禄時代の江戸城本丸御殿図再論



北

註 たつの市立龍野歴史文化資料館蔵

図9 「江戸城御本丸御表御中奥御大奥総絵図」(部分)



註 東京都立中央図書館特別文庫室蔵